

医療安全トピックス TOPICS

Vol. 188

宮崎 国子

一般社団法人 日本医療安全調査機構
医療事故調査・支援事業部

予期しない死亡が発生した際の 病理解剖における調整や配慮について

医療事故調査・支援センター（日本医療安全調査機構）では、医療事故の再発防止に向けて、さまざまな活動を展開しています。今号では、予期しない死亡が発生した場合の死因を検索する方法である「病理解剖」について、その目的と実際の具体例を紹介するとともに、実施に当たっての留意点を解説します。

医療事故調査制度（以下：本制度）は2015年に始まり、10年が過ぎました。本制度では、医療に起因する、またはその疑いがあり、かつ、予期しない死亡を対象としています。このような死亡事例が発生した場合、できるだけ病理解剖を実施し、死因の手がかりを得ることが望めます。

●予期しない死亡が発生した場合の 死因を検索する方法

予期しない死亡が発生した場合の死因を検索する方法の一つとして、病理解剖があります。病理解剖は遺族の承諾を得た上で、「患者さんのご遺体を解剖し、臓器、組織、細胞を直接観察して詳しい医学的検討を行うことです。これによってきわめて精度の高い病理診断ができ、死因を正しく理解し、治療の適切性についても検討することができます」^{1,2)}。血液検査や画像検査などから臨床的に死因を推定することは可能ですが、病理解剖では死因に関係する臓器の肉眼的および顕微鏡的な所見を直接確認することができます。

以下に「診療行為に関連した死亡の調査分析モデ

ル事業（以下：モデル事業）」（2005年9月～2015年3月）で行われた病理解剖の中で、客観的に死因が説明できた事例のうち2事例について紹介します。

1つ目は、腎臓摘出術中に大量出血した事例です³⁾。病理解剖の結果、患者の血管壁が器質的に脆弱であったため、手術操作による血行動態の変化で術野から離れた血管に負荷がかかり損傷したと解明されました。

2つ目は、成人男性が熱中症と診断されて死亡した事例で、病理解剖により食事塊が十二指腸球部に詰まっていることが判明しました⁴⁾。この患者は十二指腸潰瘍の既往がありました。潰瘍の瘢痕化により球部周辺に高度な狭窄が生じ、そこに食事塊が詰まったことで、水分が腸管に到達・通過できず高度の脱水状態に至った結果、熱中症と診断されたとの結論に至りました。

●本制度における病理解剖の実施状況

予期しない死亡は、1施設において年間に1件あるかないかです。病床規模により微差はありますが、2025年に医療事故調査・支援センター（以下：セン